編集委員が行く 其の二
塩の道 周辺 探検記

舞川の暮らし、昔談議。

塩の道」を調べていく中、広報編集委員の久保きみさんの祖父が90歳で舞川に健在と知りました。生きた 塩の道」話を聞かせてもらおうと、地元の古老たちにも加わってもらい 舞川昔談議」が実現することとなりました。

庄谷相から十七の娘が「見合い」にわが家を訪れてそのまま家に在り付いた。それがわしの女房よ。

大西理政さん（72歳）南国市在住

小松光廣さん（68歳）香我美町舞川在住

恒石文明さん（69歳）南国市在住

恒石歳春さん（90歳）香我美町舞川在住

香南市最北の地 舞川へ

市役所を出発し、香我美町山北から山川へ抜け、別役を通って、奈良峠へ。日向川の大蛇藤まで、つづら折の道を約1時間、舞川公民館に到着した。

細長い地形の香南市は、山深く、川清く、里広く、潮騒を耳に、四季を通じて温和な土地柄であることをさらに認識した。

舞川流お接待

公民館には芳香が満ちていた。私たちの訪問を歓迎して「柴茶」（実や花のついた生茶）をストーブであぶってくださっていた。「これが舞川流サービスよね」と笑いながらあいさつされた。そして、舞川の昔の暮らしや地域のこと、近隣との交流などについてお話をうかがった。

舞川公民館周辺

公民館前の三差路の橋の下にはちいさな「どんど」（滝）がある。翡翠色した淵のよどみをさらに暗くしている杉の古木に藤が絡まり空を覆っていた。これが有名な「大蛇藤」である。毎年開花の季節にあわせて「藤祭り」が行われている。

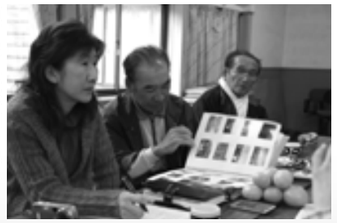
公民館の上には廃校になった北部小中学校があり、昨秋には地元出身者らが集まり13年ぶりに運動会が行われた。

淵の大蛇伝説

ここには伝説があり、昔この淵から南の棚田へ延びる穴があって、時にはその穴から大蛇のしっぽがチョロチョロ動くのを見たという話。また、その辺りに住むと資産家になるという言い伝えも。棚田の水を濁すと淵の水も濁ったという話もあって、今でも2mを超す蛇の抜け殻が、そこらあたりに見られる、と大西さん。

これらの伝説が生きていた時代、周辺の子どもたちはこの淵を敬遠して川遊びをしなかった。子どもたちが「どんど」のわきの岩から先を争って飛び込み、夏の絶好の遊び場となったのは昭和35年ごろからだ、と小松さん。

柴茶の枝をそのままあぶり、大胆にやかんに押し込む。グツグツと煮立ったお茶は、天然の最高茶である。


恒石家三代が顔を連ね昔談議

伝説のある大蛇藤

北部小中学校校舎

歳春さんの母の写真は「ガラス写真」に収まっていて、写真の下には大栃の写真館の名が刻まれていた。恒石家の先祖は粋な人たちだったと推測される。

子どものころの遊び

子どものころは玩具らしい物はなく、竹馬・コマ・チャンバラごっこで遊んだ。教室では石盤と石墨を使っていた。通学はもちろん徒歩で、わらじをはいていた。

戦時中はB29が上空を飛んでいた。

店屋の所在

近所には3軒ほどの店屋があり食品や雑貨を売っていた。洋服などは物部の大栃へ買いに行った。また、地元商店ではそろえられないものは、香北の府内へ出向いた。

赤岡への交通手段

大正5、6年ごろ郡道が開通。馬が引く荷車で、朝5時に家を出て、岸本や赤岡で買い物をして夜には帰宅していた。山からは椎茸、木炭、がんび（和紙の原料）などを持って岸本や赤岡で売りさばき、赤岡からは日用品、塩さば、干魚、鯨肉、塩などを買い整えていた。

通過する村落は、奈良峠・別役・正延・山川・堀ノ内・稗地・岸本・赤岡で片道約24㎞。通常は往復約15時間、足の早い人なら、近道を通って約8時間で往復していた。また、羽尾・国光・夜須川・手結への道をとる人もいたと小松さんの話は弾む。

野口谷には「遍路墓」があり、病弱な牛馬の捨て場にもなっていた。そこは樹木がうっそうと覆いかぶさり、昼間でも気味の悪い所だった。

婚礼・神祭

「年ごろになって、4㎞ほど美良布寄り物部の庄谷相から、娘が見合いのために我が家へ訪れて来たが、そのまま家に在り付いた。それが女房よ」と歳春さん。当時はこのように親同士の話し合いで、お互いに顔も知らずに結婚することが珍しくなかったようだ。神祭の時季には周辺の村落からお呼びがかかり、優に2週間は帰宅することはなかったと目元をほころばせながらも真面目な顔で話を続けられた。

山と木材

終戦後からの木材景気で、山はにぎわっていたと、当時山の売買を仕事にしていた歳春さん。息子の文明さんは所有の山から杉や檜を切りワイヤーで飛ばしていたころの写真を見せながら説明してくださった。伐採後、植林し良い木に成長しているが、現況の安値では伐採する気にならないとあきらめ顔だった。

伝わる昔ばなし

長谷の西、高さ714mの熊王山には悲しい物語がある。

大昔、夫婦が熊王山に差し掛かると妻が急に産気づいた。木の股に妻を押し上げた夫は、妻のために深い谷へ水をくみに下り、1時間ほどして戻った。しかし、すでに妻の姿はなく山犬に食われたのだろうとたいそう嘆き、くんできた水を供養のためにその辺りにまくと、小さな池になった。今でもその池は年中枯れることなく水をたたえているという。

「昔談議」参加者
広報編集委員
野村土佐夫
久保　きみ
田中たい子
県地域支援企画員
島内　香織

北部小中学校校舎内

夜須への塩の道もあり！

塩の道は県内に多くあって、その一つが庄谷相から、もう一つは香我美町奥西川の七社から羽尾へ。そこから芸西村へ干物やジャコの買出しに利用したということです。

さらに一つは、香我美町東川の末清から夜須へ。歳春さんの話では、やはり舞川経由・赤岡への道が主幹道だったという。

今後さらなる「塩の道」確認のため、長谷寺や羽尾を訪ね、いつの日か取材に出向かなければなるまいと思っている。